

# もりおか川と橋のヒストリア ミッションのしおり

協力：文化地層研究会

文章：岩手県庁 Ingress 活用研究会

皆さん、こんにちは。ようこそこのミッションへ。

このしおりは、岩手県庁 Ingress 研究会提供のミッション「もりおか川と橋のヒストリア」をより深く楽しんでいただくために作成しました。ぜひこのしおりを片手に対象ポータルを巡って盛岡の川と橋とが紡いできた歴史に触れてくだされば幸いです。

## 【本しおりの入手場所】

○県の公式ホームページにある Ingress 研究会のページからダウンロード願います。

## 【移動案内】

○ミッションはどのポータルからでも開始できますが、ポータルの位置関係から、開運橋、明治橋、上の橋のいずれかからスタートすると便利です。その際、次のような交通機関も利用できます。

### 1 岩手県交通：都心循環バス「でんでんむし」

盛岡駅と中津川エリアの行き来に便利です。1 乗車大人 100 円。次の URL で詳細をご案内しています。概ね 10 分～15 分間隔で運転しています。

<http://www.iwatekenkotsu.co.jp/denden-annai.html>

### 2 岩手県交通：矢巾線、日詰線など

明治橋から中の橋、開運橋方面に行く場合に便利です。最寄りの停留所は「南大通 2 丁目」です。盛岡駅行きにご乗車下さい。本数は比較的豊富にあります。盛岡駅まで大人 210 円。

## 【利用上のご注意】

- 1 各項に関係の深いミッション対象ポータルを「《 》」内に表記しています。
- 2 南部藩の歴代藩主の数え方については、地元では南部利直の父である信直を初代藩主とする考え方が一般的ですが、ここでは、ウィキペディアなどの取扱いと同様に利直を初代として関係記事を書いております。あしからずご了承ください。
- 3 橋の名称などの漢字の表記について、本書においては一般的に用いられている漢字で表記しています。（例えば、「明治橋」袂の碑には、「明」が「目」偏の書体で書かれています。）

## 【序章 盛岡は清流と橋のまち】

盛岡市は、北上川が市街地の南北を貫き、これに東から中津川や築川が、西からは雫石川が合流しており、江戸時代初期、南部氏が本拠地としたことによる藩政のはじまりとともに都市の姿が形成されて以来、これらの川は、時に大洪水をもたらす困りものと変貌しながらも、長い間、盛岡に生きる人々の暮らしのすぐ傍にある存在として親しまれてきました。

市内を流れる川と深い縁にあるのが数々の橋です。かつては一本の橋をかけるのさえ容易ではなく、また、幾度となく盛岡の街を襲った洪水はそれらの橋をことごとく破壊し、人々に大きな被害をもたらしてきました。そうした洪水との闘いの末に、いわば反乱(氾濫)を平定し、先人たちは街を発展させてきました。

いったい現在架かっている橋はそれぞれ何代目になるのでしょうか？ひとつひとつの橋にも先祖代々がある、というわけですが、そんな歴史物語を、近傍の関連ポータルも含め楽しく巡って参りましょう。

## 【第1章 中津川】

### ○「中津川三橋」

盛岡市街のど真ん中を流れる中津川。夏は子どもたちが水遊び、秋にははるばる太平洋から遡上した鮭がゆうゆうと泳いでいる姿がみられます。冬期間は、運が良ければ羽を休める白鳥の姿が見られるかもしれません。



盛岡市民に愛されている橋のうち、江戸時代初期に、相次いでこの川に架けられた3つの橋、上の橋、中の橋、下の橋を総称して「中津川三橋」といいます。3兄弟ですね。では、中津川に一番最初に架けられた長男、上の橋から順に訪ねてみましょう。

## 上の橋《1 上の橋擬宝珠》《2 鍛冶町一里塚跡》

### ○中津川で一番最初に架けられた橋

上の橋の高欄には一見してそれとわかるネギ坊主のような特徴ある形をした「擬宝珠(ぎぼし、又はぎぼうしゅ)」が取り付けられています。これを良く見ると「慶長十四年巳酉年十月吉日 中津川上之橋 源朝臣利直」という文字が彫られています。どうぞ確かめてみてください。

「利直(としなお)」は、盛岡を本拠地として築城と町の整備を進めた南部氏27代、南部利直公のこと。慶長14年は西暦1609年です。まさに町づくりが進んでいた時期で、当時は本町通りが盛岡のメインストリート、奥州街道でした。最初に架けるべき橋が上の橋だったことも頷けます。その名残が鍛冶町(かじちょう)一里塚跡。この一里塚が当時の盛岡の基点、つまり全国の街道網でいう盛岡の位置を示すものでした。ちなみに、次の一里塚がアネックスカワトク前の上田一里塚、そして奥州街道は遠く北海道は松前まで続いていたのです。

現在の橋は1935(昭和10)年に架け替えられた鉄筋コンクリート製。欄干や照明は木製で、

城下町盛岡を代表する橋となっています。

#### ○国指定重要美術品「上の橋の擬宝珠」

ポータルの名称にもなっている「擬宝珠(ぎぼし)」は、国の重要美術品(現行の文化財保護法施行以前に指定されたもの)です。重要美術品が日常の市中で使われているのは非常に珍しく、全国でも京都三条大橋と盛岡の上の橋、下の橋の三橋のみです。

かつては上の橋と中の橋に付けられていたのですが、たび重なる洪水などで消失し、現在残っているのは、計18個。太平洋戦争の末期、金属不足のため危うく軍部に供出しなければならなくなるところを、地元の実業家の尽力で急きょ国の重要美術品の指定にこぎつけ、難を逃れました。

ところで、擬宝珠は古来大変貴重なもので、天皇の住まいのある場所(京都)でしか使えないことになっていたといわれています。それがなぜ遠く離れた盛岡にあるのか?これには次のような逸話が残っています。

\*\*\*\*\*

利直公からはるかに遡る南部氏 12代政行公の時世(1330年代)、京都で番役を務めていた政行公が詠んだ歌が時の天皇を大変感心させ、「都人にも勝る歌人なので、何か都の趣のあるものを自国に移してよい」とのお達しにより、擬宝珠の取付けを勅許された。早速、当時の本拠地三戸城下で取り付けられ、その橋は「黄金橋」と呼ばれたという。

利直公は盛岡に本拠を移す際、これらを持ってきて、鋳直したり数を増やしたりして三橋を整備した。

ちなみに、かつて政行公が詠んだ歌は次のとおり(天皇からのお題は「春鹿」。時ならぬ春の鹿の鳴き声に都人が動揺したため、天皇が「歌伏せ」にすることを命じたという。)

「春霞 秋たつ霧にまがわねば 思い忘れて鹿や鳴くらん」

\*\*\*\*\*

## 与の字橋 《3 与の字橋》《4 紺屋町番屋火の見櫓》

#### ○橋の名前のいわれ

与の字橋(よのじばし)は、上の橋と中の橋の間にあります。初めてこの橋が架けられたのは1877(明治10)年、現在東北電力岩手支店がある場所に第一国立銀行が開業し、県庁との行き来の必要が生じたためといわれ、その当時は「銀行橋」と呼ばれていたとのこと。その後の洪水で流失し、1889(明治22)年、盛岡市内の消防組織である「よ組」が消防活動上必要としたため架けた、と記録されています。そしてその番屋に近いことから「与の字橋」と名付けられました。

この件は、ちょっと大変ですが、東北電力側の川べりにある階段から河川敷に下りて橋の直下に行ってみると、河岸土台のコンクリートに橋の名前とともにこうしたいわれが記載されています。

意外?なことにかつては盛岡初(1925(大正14)年)の鉄筋コンクリートの橋げたを使った橋でした。現在の橋は1969(昭和44)年に完成したものです。

### ○市民が下を覗く橋

ところで与の字橋は(与の字橋だけではありませんが)、ある季節「通る人がやたらと橋の欄干から身を乗り出すようにして下を眺めている」ことでちょっと有名です。盛岡市民の方ならすぐわかりますね。

橋の盛岡市役所側のたもとには「鮭ののぼる川」の看板が設置されていますように、皆、はるばる太平洋からふるさとの川に帰って来た鮭を眺めているのです。ちょうどこの橋の付近からちょっと上流のあたりは中津川の流れも緩く、泳ぐ姿を見るのもってこいなのです。

## 中の橋《5 鮭のモニュメント（中ノ橋）》

### ○庶民は通行禁止!?!の橋

鮭といえば、このポータルのもニュメントはまさに鮭が川を上る様ようで、かわいいですね。

中の橋は、今でこそ大通・内丸エリアと河南エリアを結ぶ市内でも最も重要な交通の要衝となっていますが、上の橋に遅れること2年、1611(慶長16)年の完成当時、上流側からみて岩手公園側は盛岡城の城内。もっぱら城内に参勤する上級武士だけが通る専用橋だったようで、庶民にはほとんど縁のない橋だったようです。

### ○市内初の洋式橋となる

明治も後半になると、現在の中ノ橋通一帯は盛岡の金融街として栄えるようになりました。有名な岩手銀行中ノ橋支店の建物を始め、このあたりには当時の面影を残す重厚な洋風建築が数多く残っています。これらの散策はまた別の機会をお作りいただくこととして、1910(明治43)年の大洪水で流失後に県内で初の洋式の橋に架け替えられました。現在の橋は、1956(昭和31)年に完成、1979(昭和54)年に改修されて今に至っています。

## 毘沙門橋《6 毘沙門橋》

### ○大正天皇用？

中の橋と下の橋の間には毘沙門橋(びしゃもんばし)という歩行者専用の橋が架かっています。この橋の歴史は、1908(明治41)年、急きよ近隣の町内有志が吊り橋を架けたことに始まりますが、その事情はちょっと変わっています。

岩手公園(盛岡城跡公園)の本丸には、南部中尉銅像台座(ポータルにもなっていますね)があります。その主、南部家42代の南部利祥(としなが)公は時の皇太子(大正天皇)の学友でした。陸軍に仕官し日露戦争に出兵、満州の最前線で1905(明治38年)に戦死しました。政府からは勲章が下賜され、維新以来の朝敵の汚名も返上できたということで、その遺徳を顕彰するため旧盛岡藩士たちが銅像を建てることになったのです。その除幕式が盛大に行われた1908(明治41)年の9月15日から2週間後、陸軍の演習観閲のため来盛した皇太子が学友の銅像をご覧になるというので、宿舎との間を行き来する便宜のため造られたのがこの橋、というわけです。ところが、実際には皇太子の宿舎は同年に完成したばかりの南部家別邸(現盛岡市中央公民館)になったため、毘沙門橋を渡ることはありませんでした。

ちなみに銅像本体は戦時中の金属供出に協力したため、惜しくも現存していません。台座の傍らに堂々とした姿の往時の写真のみが残されています。台座は旧第九十銀行(現もりおか啄木・賢治青春館)も手掛けた横濱勉の設計によるものです。

現在の橋は 1961(昭和 36)年建設。

#### ○名前のいわれ

ところでどうして毘沙門橋と言うのでしょうか？現在の鶴ヶ池がまだ盛岡城内の内堀だった頃、お堀りから中津川に水が注ぐ手前に毘沙門堂があったことが 1766(明和 3)年の盛岡城内図に見ることができ、注ぎ口のところが毘沙門淵と呼ばれていたから、というのが有力な説です。

### 下の橋《7 下の橋、8 中津川治水碑》

#### ○こちらにも擬宝珠が・・・

盛岡の河南地域と大沢川原、菜園地域とを結ぶ、1612(慶長 17)年、上の橋、中の橋に続いて架橋された、三橋では末の弟。その当時、盛岡城(菜園側)の対岸には上衆小路、馬場小路と言われるような侍町があり、城の裏門への通路であったので、当初は武士が多く利用していました。

下流のため水害の影響を受けやすく、中津川三橋の中で一番落橋が多かったとのこと。現在の下橋は、1910(明治 43)年の大洪水の後、1912(大正元)年に架け替えられたものです。かなり古いですね。木製の欄干と江戸時代の青銅擬宝珠 18 個が据え付けられ、城下町だった藩政時代の面影を伝える景観を醸し出しています。

盛岡城側東にある擬宝珠には、上記の大洪水後の橋の架け替えにあたり、それまで中の橋に付けられていた擬宝珠が下の橋に移されたいきさつが刻まれています。

「此擬宝珠元中橋欄干之物

明治四十三年九月三日

洪水破橋今茲改築之際轉用之下橋

大正元年十一月 盛岡市」

#### ○「明治 43 年の盛岡大洪水」

これまでのストーリーにたびたび出てくる「明治 43 年の大洪水」とは、いったいどういうものだったのでしょうか。

時は 1910 年(明治 43)年 9 月 3 日。以下のお話は、(株)熊谷印刷さんが発刊した「もりおか物語」の資料などからまとめたもの、として紹介されている一文です(一部省略あり)。

\*\*\*\*\*

二日の夕刻より降り出したる雨は、次第に量を増し勢を添えて、夜半のころにはあたかも束篠(つかしの)を突くがごとく(注・雨がはげしく降るさま)、ついに 180 ミリ(一坪の雨量三石三斗二升七合)をかぞえらるるに至れり。

(中津川は)三日朝四時ごろから刻一刻と増水しきたりて、ついに橋を落し家を流し崖を崩し樹を倒し、巨木大石家屋財物等を混じて流下する光景は、せいそうさんれつ(凄蒼惨烈)名状すべからざるものありたり。かくして午後三時半、水量は最高に達し、平水より多きこと約十三尺

に及びたり。

中津川上流なる浅岸にて穿師橋・北瀬橋・板橋等の小橋はいずれも落下し流れきたりして、川止橋の右たもとを越え、市内三橋の一なる上の橋に押しかかる。しかし、橋上に土俵石材等を載積して重量を添えたるも防止することあたわず、ただ橋欄に冠したる擬宝珠を取りたるのみにて、枓は見るまに中断して、渦巻く濁流中に没したり。時に午前八時過ぎなり。

よの字橋は、上の橋に先だてて流失し、毘抄門橋は午前九時ごろ流失して、その下流なる盛岡三橋の一なる下の橋に停滞したるため、下の橋は午前九時過ぎその半ばを失い、さらに十一時過ぎ全部を流失し終れり。

かくて市中の橋梁は中の橋を存するのみ。時あたかもよし工兵隊の来援せるありて、あらゆる方法を尽し流失防禦につとめたるも、ついに人力の及ばず、午後二時二十五分井然たる響きとともに落下流失す。

これより先、二時ごろとおぼしきとき、上流にありたる川止橋も流失し、市内の橋梁全部を失う。これらの諸橋梁・家屋・樹木等が無数に流下して北上川に入りたるをもつて、盛岡最大の橋たる明治橋は半ばを流失し、一市は三区に分割さる。

〔参考サイト〕

「料亭丸竹の歴史」 <http://www.geocities.jp/sisterdqa/morioka3/marutake.htm>

\*\*\*\*\*

このような文語調で読むと、ますますものすごさが伝わりますね。この水害に関しては、県下の北上川流域で死傷者 6 名、住宅被害 8,708 棟、橋の流失 124 か所という甚大な被害の記録が残っています。そして、北上川水系の河川改修が本格的に検討される契機ともなりました。この後、地元が官民挙げて復興に努力した姿を思うと、今の私たちにも勇気が湧いてくるような気がします。

下の橋のすぐそばに立つ「中津川治水碑」は、この大惨事を乗り越え中津川の治水工事を完了した記念として、1912(大正元)年に建立されたものです。

今回はその紙幅がありませんが、こののちの盛岡の復興と発展に尽力した三田義正の物語にも、またの機会にぜひ触れていただきたく存じます。

さて、ここまで歩いてきた中津川もだんだんと北上川との合流点に近くなってきました。それではいよいよ北上川ゆかりの物語に進んで参りましょう。今回は、数ある北上川に架かる橋のうち、盛岡を代表する2つの橋を巡りたいと思います。

## 【第2章 洪水と毒～北上川治水史】

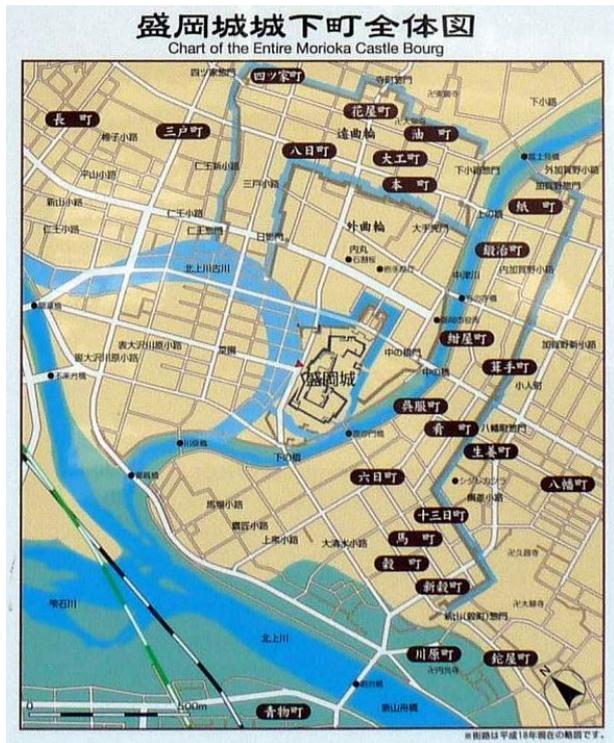
### ○南部重信(しげのぶ)公の大工事

江戸時代初期まで、北上川は現在の旭橋付近から東に曲がり、大通、公園下(つまり南部氏のお城は川べりに建っていた!)を通して流れていました。

たび重なる洪水で築城工事の中断を余儀なくされたり、影響は城下町まで及んでいたため、29代南部重信(利直を初代の藩主とする)が北上川を現在のルートに付け替えることを決意、1673(寛文13)年に工事開始、1675(延宝3)年に完成させ、現在に至っています。

この工事によって、それまで北上川の反対岸だった現在の菜園や大沢川原が城下町に組み込まれ、城のすぐそばに新しい土地が生まれたことで、その後の盛岡市の都市形成に大きく寄与した、と言えると思います。

市内を歩くと気が付くと思いますが、中央通りと大通りとは土地の高さが違い、両者を繋ぐ映画館通りも中央通りから大通りに向かって下っています。これも川を埋め立てた名残りです。



## 剛腕、石井省一郎とその私邸《9 旧石井県令私邸》

### ○開運橋の産みの親

石井省一郎は、1877(明治10)年に初代の内務省土木局長に就任した人で、当時「土木の石井」と言われたほど数々の業績を残しました。1884(明治17)年に岩手県令に就任、その後岩手県知事となり、1891(明治24)年初めまで在任しました。

石井知事時代の特に大きな出来事は、1890(明治23)年の東北線盛岡駅開業でした。知事はこれに際し、駅と市街を直結する道路と橋を建設する構想を描きました。しかし当初、盛岡市は橋の建設を否決、それでも知事はあきらめずに市内の財界人に呼び掛け、知事肝いりで民間の手によって橋の建設が進みました。

橋は、駅開業の1か月前にギリギリ完成(完成の翌年、盛岡市が買い取りました)、その橋の名「開運橋」には、鉄道の開通で更なる発展を願う人々の思いが込められていたのでしょう。もちろん石井知事が名付け親と言われております。

### ○暖炉や地下室を備えたレンガ造りの美しい洋館

ポータルとなっている建物は、石井が着任した直後に河南エリアで大規模な火事があり官舎を焼失したため、自ら現在地に洋館及び和館を建設しました。広大な庭園を持つ邸宅で、その火事の火元であった監獄署の建替えのために焼いたレンガを持ってきて、未決囚の手で積んで

造った、というような当時の県令の権力の一旦が伺えるエピソードも残っています。

## 新山舟橋と明治橋《10 明治橋》

### ○明治橋の架橋

皆さんもお気づきと思いますが、ポータルになっている「明治橋」(明治橋碑)は、現在の橋の位置から大分下流(南側)にずれていますね。

このあたりの地域は、藩制時代から奥州街道が通り、盛岡の南の玄関口として重要な地点でした。古くから渡し舟や土橋の設置が試みられていましたが、延宝8年(1680)に、舟を並べて板を渡した浮き橋が初めて架けられ、「新山舟橋」と呼ばれていました。当時は全国的にも有名なものだったそうです。少しの増水でも通行できなくなるため不便だったと思いますが、本格的な架橋は、明治の時代まで待たざるをえませんでした。

長年の念願だった新橋(当時は木製の土橋)は 1874(明治7)年、初代県令(県知事)島惟精(しまいせい)のもとで、明治天皇の巡幸に間に合わせようと新山舟橋跡に完成を見、名実ともに明治橋となりました。明治橋碑には、「明治六年」と彫ってありますが、この碑はもともとこの橋の工事の際中、川の中央に造成された中島に建てられたもので、のちにこの場所に移設されたものなのです。

その喜びもつかの間、1 か月もしないうちに洪水で流失、その後もたびたび流失を繰り返しましたが、ようやく 1932(昭和7)年 7 月になって、旧橋から約 100m 上流の現在地に永久橋が完成、何度か改修、拡幅されて現在に至り、仙北地区と南大通を結ぶ交通の要衝となっています。



### ○舟っこ流し

盛岡の夏の風物詩、「そろそろ夏も終わりかあ」と気付かされるお盆の行事ですね。近隣の町内会等が協力して提灯や供物などで飾りたてた舟を作り、明治橋上流付近から一艘ずつ川へ流して、火を付けます。

舟っこ流しの始まりは、南部氏 30 代(盛岡藩 4 代藩主)南部行信公の時代にさかのぼるといわれていますが、1815(文化 12)年に起こった北上川での船の転覆事故で亡くなった者たちの霊を慰めるため、舟に位牌と供物を乗せて流すようになったことから、先祖の霊を供養するものとして以後盛んになったといわれています。

### ○現代の治水「岩手の“ニューディール政策”～北上川5大ダム構想と盛岡を守る3つのダム」

これまでのお話にもたびたび出てきたように、古くから盛岡市や岩手県は洪水の被害に見舞われてきました。

1950(昭和 25)年、国土総合開発法という法律ができ、この下で岩手宮城にまたがる北上川流域は特定地域に指定され、洪水調節をはじめとする総合的な開発計画が進められることになりました。岩手県内では、いわゆる「五大ダム構想」と言われるダム整備がスタートし、石淵ダ

ム(S28)、田瀬ダム(S29)、湯田ダム(S39)、四十四田ダム(S43)、御所ダム(S56)と順次完成していきました。

盛岡市の洪水被害防止に特に関わるのは、上記の四十四田、御所の2つのダムに加え、県営で初めて建設された綱取ダム(S57)で、これで市内の主要3河川全てにダムが整備され、今日に至っています。

## 開運橋《11 開運橋》

### ○有料だった通行

前述のように石井県知事のもと、開運橋は1890(明治23)年10月に完成しましたが、当時はまだまだ増水にはもろく、維持には多大の費用がかかったことは想像に難くありません。それを賄うため、明治期には、夕顔瀬橋、明治橋も含め橋を渡るには「橋銭」と言われる通行料が必要でした。今でも橋が有料道路になっている例がありますが、ごくわずかで、一般には橋が有料だとは考えられませんね。

特に開運橋は、その開通の経緯からずいぶん高額な通行料が必要だったようです(1人当たり1銭だったと言われており、これはちょうど当時のハガキ代に当たります。)。開通の翌年、盛岡市が買い取ったことで徴収は廃止されました。

### ○「二度泣き橋」

先に明治43年の大洪水のお話をしましたが、この時開運橋も落橋してしまいました。ようやく1917(大正6)年になって鋼製の永久橋に架け替えられ、さらに1953(昭和28)年、現在の特徴あるアーチ型の橋となりました。

ところで、開運橋には「二度泣き橋」という異名があることをご存知ですか？首都圏などからの転勤族の間で語られたのが由来と言われており、初めて盛岡に来た時に開運橋を渡る際「遠く離れた所まで来てしまった」と一度泣き、在任期間を終えて盛岡を去ることになったとき盛岡駅へ向かう途中再びこの橋を渡る際に、今度は離れるのが辛くて泣く、というわけです。

盛岡に住む者にとっては、橋の名前とすれば「変な名前」と思ってしまうかもしれませんが、その理由が分かるとちょっと嬉しいような気持ちになりますね。

### ○読み物「北上川の清流復活史～旧松尾鉱山の坑排水問題」

開運橋から眺める岩手山のすがたは盛岡を代表する景観の一つです。下を流れる北上川の青い流れが川べりの木や綺麗に整備された花壇に映えて一層の魅力を作りだしています。魚も豊富に生息し、冬は運が良ければ白鳥が羽を休める様子も見られます。今やこうした風景はすっかり見慣れたものになりましたが、この北上川を清らかなまま維持するために、一日も休まず支えている施設があることをご存知でしょうか？

話は、1882(明治15)年から始まります。盛岡の北部、八幡平のふもとにある松尾村(現在は八幡平市)で硫黄鉱床が発見されました。その後、1914(大正3)年に松尾鉱業株式会社が設立され、最盛期の1955(昭和30)年頃には年間8万tの硫黄を生産、「東洋一の硫黄鉱山」となりました。

周辺には1万5千人もの人々が暮らし、その隆盛ぶりや住居・病院・学校・劇場などの福利厚

生施設が充実していた様子から「雲上の楽園」と呼ばれたほどです。当時、この会社が岩手県にもたらした経済的な恩恵は多大なものがあり、加えて製品の搬出港として八戸港が発展するきっかけを作ったこと、鉱山からの多額の寄付が盛岡高等工業学校(現在の岩手大学工学部の前身)設置の決め手になったことなど、企業の地域貢献の先駆け的な存在でもありました。

一方で、鉱山から流出するヒ素を含む大量の強酸性の坑排水問題は、大正時代の後期には表面化、企業による石灰の注入などの中和処理が行われていましたが、昭和初期にはその被害が盛岡以南にまで及び、大きな社会問題になりました。

北上川の水の色は盛岡市内でも黄土色に濁り、サケなどの生物も姿を消し、まさに死の川となっていました。年配の市民の方なら、この頃の光景を覚えている方も多いと思います。

運命を決定づけたのは意外にも原油。昭和 40 年代に入ると石油精製の際にできる安価な回収硫黄が席卷し、松尾鉱山は大打撃を受けて 1971(昭和 46)年に採掘を中止、ついに翌年には鉱業権を放棄して閉山しました。

これより少し前の 1968(昭和 43)年、希釈・沈殿能力と酸性水に対応する特殊な構造を持つ四十四田ダムの完成により、ダム以南についてはある程度の清流化が実現、さらに、岩手県は 1971(昭和 46)年から北上川の清流化のための本格的な対策に着手、その後 1981(昭和 56)年には、坑排水を中和し沈殿物を除去する新中和処理施設を完成させました。これにより劇的に水質は改善され、サケも戻って来るなど現在のよう美しい環境を取り戻すことができました。

この中和処理は、年間5億円以上の費用をかけ、現在も 24 時間 365 日続けられています。近代産業発展過程での光と陰の両面を伝える証人とも言える中和処理、この稼働のお陰である開運橋からの景観があることを記憶に留めおいていただければ幸いです。



これで、このしおりとミッションのちいさな旅はおしまいです。

長い文章、おつきあいいただき有難うございました。ご感想などあれば、下記事務局までお寄せいただけますと幸いです。

参考文献:「もりおか歴史散歩」(文:「アップル」編集部、東北堂刊)

「もりけん本 SUPER Ver.2」(盛岡商工会議所刊)

写真引用:サイト「いわての旅」((財)岩手県観光協会)

<http://www.iwatetabi.jp/>

サイト「いわての文化情報大事典」

<http://www.bunka.pref.iwate.jp/>

協力:文化地層研究会

発行:岩手県庁 Ingress 活用研究会

事務局:岩手県秘書広報室調査監

連絡先 019-629-5503

[AA0008@pref.iwate.jp](mailto:AA0008@pref.iwate.jp)

作成日:平成 27 年 2 月 10 日